

# 日本のお正月と陰陽五行思想

ブ・ティ・ニヤイ

## 1. はじめに

小さいころの私にとってお正月は一年中で一番楽しい時期であった。子供たちは両親に新しい服を縫ってもらったり、遊びに連れて行ってもらったりしてもらう上に、お年玉ももらえる時だからであった。一年間どんなに苦労しても、お正月になると、ベトナム人の各家は伝統的な習慣に従い、お供え物や料理を揃え、神様や仏や先祖に供える。そのしきたりがいつから始まるか誰にも分からないが、庶民に信じられ、伝えられてきた。お正月が一番楽しい時だと思っていただけの素朴な私は大人になり、そのしきたりの表面に隠されている起源や意味に関心を持ちはじめた。なんにも分からずお正月を楽しむよりしきたりの目的ができればもっと楽しいと感じられた。

平成24年の10月に私は日本の広島県東広島市に来て、やがて平成25年になった。クリスマス、お正月や春を迎える雰囲気広がりが、スーパーで日本のお正月に欠かさなくてはいけない飾り物、食べ物がたくさん並んで売られていた。あの時私はそれがはなんという名前で、どんな意味、目的を持っているか知りたかった。またお正月の時、日本人は何をするか、ベトナムのお正月とどのような点が違うか、類似点がないか調べたいと思った。嬉しいことに、福島県に住んでいる日本人の家族に年末から誘ってもらい、私は行くことにした。そのおかげで、本に書いてある日本の正月行事が直接体験でき、日本人に正月に関する話をしてもらえた。

お正月は旧年が無事に終わったことを祝い、年初めに年神様を迎える行事である。年神様とは新しい年の豊穡をもたらし、人々に命を与える神様であり、いつも私たちを見守っている先祖の霊であると考えられている。それでお正月はすべてのものが新たになる大切な日で、その年の作物が豊かであるように、家族が幸せに健康に暮らせるように皆で記念する日である。

お正月を迎えるために、日本人はいろいろな行事を行い。その行事は昔から伝わってきたものだが、なぜその行事があるのだろうか。それは陰陽五行思想と密着な関係があるそうである。では陰陽五行思想というのは一体なんだろうか。お正月のしきたりとはどんな関係があるのだろうか。

## 2. 陰陽五行思想

陰陽五行思想とは中国の春秋戦国時代ごろに発生した陰陽思想と五行思想が結び付いて生まれた思想のことである。陰陽五行思想は「太一陰陽五行思想」とも呼ばれている。古代中国哲学によれば、陰陽と五行は一つしかない北極星から派生されたからである。

### 2.1 北極星(太一)

北極星は天の北極に最も近く、動かない星である。北極星の神靈化が最高の天神で、「太一」であり、北極中枢附近のもっとも明るい星である。極星の周りにある北斗七星は天帝である北極星を中心にして動いている。

### 2.2 陰陽(二元思想)

原初は唯一の存在である北極は天下未分化の混沌の状態であった。その後、この混沌の中から明るく、軽い澄んだ気が上に上がって天となり、つまり太陽で火気となる。次に暗く重い濁った気が沈んで地となり、月で水気である。

### 2.3 五行

太極から派生した陰と陽の2元が交感交合して天上には木火土金水の5原素が生じたそうである。五行の五はこの5原素を示し、行は作用とか動くことを意味する。

生成順(派生の順序)：水 → 火 → 木 → 金 → 土

水」は「五行の首」と呼ばれている。なぜかという中国古代理想によると、宇宙間に最初に生じたのは水だというのからである。

- ・太極が陰陽に分離し、陰の中で特に冷たい部分が北に移動し水行を生じた。
- ・次いで陰の中で特に熱い部分が南に移動し、火行を生じた。
- ・さらに残った陰気は東に移動し風となって散って水行を生じた。
- ・残った陰陽が西に移動し金行を生じた。
- ・そして四方の各行から余った気が中央に集まって土行が生じた。

この五行の相互間には、相性が良いとされる「相生」、相性が悪いとされる「相剋」がある。



図1 五行相生と五行相剋

図1は五行相生と五行相克を示している。赤い矢は相生、黒い矢は相克を示す。

**相生順**：この説は素朴な自然の理によっていると言える。

木生火：木は火で燃える。火は木があるとさらに燃え盛る。

火生土：火は燃え尽きると灰となり、土を肥やすと土は火を中和する。

土生金：金属は土から産み出される。

金生水：金は火で鑄造したら液体になる。

水生木：水は木の栄養となり、木を大きく育てる。

このような関係から木→火→土→金→水の順に巡って行けば何事もうまくできると考えられた。

**相剋順**：五行の相剋順は次のように説明されている。

水剋火：水は火を消してしまう。

火剋金：火の熱で金属が溶けてしまう。

金剋木：金属は木を切ってしまう。

木剋土：木は土から養分を吸い取って生長する。土が痩せる。

土剋水：土は水を吸い取ってしまう。

## 五行配当表

この世の中の万物は5つの観念化したグループに分類されている。

五行 (ごぎょう)	木	火	土	金	水
季	春	夏	土用	秋	冬
十干	甲乙	丙丁	戊己	庚辛	壬癸
十二支	寅卯	巳午	丑・辰 未・戌	申酉	亥子
方 (方角)	東	南	中央	西	北
色	蒼 (青)	朱 (赤)	黄	白	玄 (黒)
聖獣	蒼龍 (せいりゅう)	朱雀 (すざく)	黄龍 (おうりゅう)	白虎 (びやっこ)	玄武 (げんぶ)
音	角 (かく)	徵 (ち)	宮 (きゅう)	商 (しょう)	羽 (う)

調子	双調	黄鐘調	𪛗越調	平調	盤渉調
常 (徳)	仁	礼	信	義	智
数	八	七	五	九	六
味	酸	苦	甘	辛	カン
虫	麟 (りん)	羽	裸(ヒト)	毛	介
臓	脾 (ひ)	肺	心	肝	腎
情	喜	楽	慾 (よく)	怒	哀
穀	麦	黍 (きび)	粟 (あわ)	米	豆
根	目	舌	唇	鼻	耳

表① 五行配当

この表を縦方向に読むと、同じ氣に当てはまるものは互いに関係があることがわかる。例えば木氣に相当する欄を縦に読んで行くと惑星としては木星、色としては青、方位としては東、季節としては春を意味することが分かる。木氣を象徴しているものは春や青や寅、卯などである。日本の正月の行事の起源を説明するのに表①の五行、五色、五時、十二支が使われる。

五行の「相生順」と「相剋順」に基づいて、春を迎えることを目的に多くの正月の行事が始まった。迎春の手段については二つの方法に分けられる。一つは「直接法」であり、もう一つは「間接法」である。「直接法」とは木氣の春の前にある水氣の象徴物を殺すこと。「間接法」とは木氣の春を剋する金氣の秋の象徴物を殺すということ。

### 3. 五行説に関する日本の正月行事

#### —直接法—

##### ・カニの串刺し

長野県には1月6日に「かに」と書いた紙を出入り口に貼る風習がある。この風習は昔からの行事であるが、由来が分かる人は少ない。昔は蟹が十二支の一匹であり、蟹年もあったと言われる。元は新年に沢蟹を捕り、萩や豆本の串に刺し、戸の口に付け、魔除けとされた。しかしだんだん蟹が捕れなくなったため、その代わりに蟹の絵を描いて貼ったり、

または「かに」「カニ」「蟹」を書いた半紙（5cm×8cm）を入口に挿し、燃やすようになった。蟹は水中にいるから、水気の冬の象徴とされた。春の直前である冬の蟹を殺すことで水気を弱め、春の気である木気を盛んにし、春の訪れを促すのである。「蟹串刺し」が迎春を目的にした行事であるのは明らかである。

#### ・ 鬼

鬼も蟹と共に水気の冬の象徴とされ、鬼を抑えることは一気に春を迎える直接呪術であると言える。正月に「鬼」を書いた的を射る行事があったり、以前は正月に行われていた豆まきと鬼が結びついているのはこのためである。

#### ― 間接法 ―

表①の十二支の行を見ると、申と酉と戌は金気に該当するのが分かる。しかし金気は木気の春を剋するから、金気の特徴物を殺したり、抑えたりするのは木気の春が来ることを促す。それで申と酉と戌に関係がある迎春の行事が行われたのである。

#### ・ 犬餅

以前は日本でも旧正月だったが、明治5年から新暦に変わった。旧暦でいうと、正月は2月頃である。新潟県では前から今までも2月一日に「インノコト」という団子を作り、戸の口に飾る。または秋田で子犬の形である「イヌモチ」を作り、子供にあげる。

#### ・ 食べ物：鏡餅

鏡餅とは神仏に供える正月の餅であり、「お鏡」、「お供え」、「お重ね」などと呼ばれる。鏡餅と言われる理由は昔の鏡の形に似ているからだそうである。昔の鏡は円形で、神事に用いられるものであった。大小二つ重ねるのは月（陰）と日（陽）を表し、福德が重なっていると考えられているそうである。

地方や家風によって、鏡餅の飾り方は少しずつちがうが、次のような形が一般的である。三方の上に二枚の半紙を敷き、裏白（純白な心の象徴）とゆずり葉（家系が絶えない象徴）を置く。その上に大小二個の丸餅を載せ、上の餅の頭から昆布を置いて、その上に橙（家が代々繁栄する象徴）を載せる。伊勢海老が橙を抱えように水引きで結んだり、串柿を添えたりする。いい縁起物を添える鏡餅を神仏に供え、それは良い新年を願うと共に、1年間の暮らしを支えてくれた神仏に感謝の気持ちも込める。

鏡開きというと、鏡を割ると思われがちだが、そうではない。鏡開きとは11日は神様に供えた鏡餅を下ろし、餅の開きをすること。なぜ鏡開きというのか。武家社会では「切る」や「割る」という言葉は嫌われた。「切る」や「割る」という言葉はおめでたい時には縁起が悪いので使わなかった。または運を「開く」と言う意味を込めて鏡開きと名づけた。橙、ゆずり葉、昆布、裏白などを飾った鏡餅は神様を祀る象徴であり、この餅を食べ

ると、神様の力を得ると考えられている。それで鏡餅を砕いて雑煮、ぜんざい、汁粉などを作って食べる。しかし餅を砕く時は刃物を使わずに手と木槌を使う。理由は刃物が神様の嫌うものだから。

#### ・鳥追い

鳥は犬と同じ金気の象徴だから、金気の鳥を追い出すこととか殺すことは金気を攻撃し、木気を支える。

静岡県での節分の鳥追いは鳥追いが迎春呪術であることを示す例である。例えば、追い出される鳥はさぎ、烏、鴨などである。白いさぎは金気、黒い鳥は水気の象徴で、また鴨は冬の鳥だから水気の象徴である。それらを追い出すのは秋や冬を送り、春の訪れを呼ぶことになるのである。

#### ・お正月の遊び：羽突き

羽根つきは室町時代に中国から羽根を蹴る遊びが日本に伝わったことが起源とされている。羽根つきの羽根はムクロジという実に鳥の羽をつけたものである。ムクロジは「無患子」と書く。今のように医療が発達していなかった時代は多くの人たちが感染症などの病気で亡くなった。その中に子どもの死者は多かったようである。それで、子どもが病気になるように、正月に子供に羽根突きで遊ばせた。

なぜ羽根突きが病気を防げると考えられるのか。昔は病気の原因は牛や馬の血を吸う蚊だと考えられていた。そしてその病気をもたらす蚊を食べてくれるのがとんぼである。それで、羽根をトンボに例え、空気中に打ち、病気の原因である蚊を食べてもらうという。

さらに羽根突きは春を迎える行事であり、五行説で説明される。羽根突きが鳥の羽で作られる。そして五行配当表である表①の十二支の行を見ると、鳥は金気に属する。金気の範疇に入るものは季節は秋である。五行の相剋順で言えば、金気は木気（春）を剋す。金気を弱めないと、木気（春）が出てこず、つまり春が来ない。金気を弱め、このような理由で金気を弱めるために金気の象徴である鳥の羽で作られる羽根突きを空中に打ち、春が早く来るようにと願った。そのため羽突きは正月の代表的な遊びの一つと考えられるようになったのである。

#### ・差義長

佐義長とは、小正月に行われる行事で、地域によっては「どんど」、「ほっけんぎょう」、「ほちょうじ」などとも呼ばれている。左義長は平安時代の宮中の儀式である三毬杖に由来する。平安時代の三毬杖は青竹を3本束ね、立て、その上に扇や短冊を吊るし、陰陽師がこれを焼きながら悪魔払いをする儀式だった。

現在の左義長は1月14日の夜または1月15日の朝に長い竹を3、4本組んで立て、そこに飾った門松や注連飾り、書き初めで書いた物を持って来て燃やす。なぜそんなものを

燃やすかという、新年に降りた神様が煙に乗って天上に戻ると信じられているからである。または自分の書き初めの灰が空に高く舞い上がれば、字が上手になると言い伝えられている。

さらにその火で餅や団子を焼いて食べると、邪気を祓い、その年は病気になることなく、元気に過ごせると言われている。他に餅を焼くのは五行説に基づいて春を迎える行事なのではないかと私は思う。餅は白く、もち米から作られ、金気の象徴とされている（表①）。木気の春の迎えのために、金気の餅を火気の火で剋するのである。

陰陽五行とは直接の関係が認められないが、宗教と関係がありそうな正月の行事を以下に挙げておく。

### **\* 大掃除**

年末になると、旧年を送って新年の訪れを迎えるためのいろいろな準備で忙しくなる。その大仕事の一つは家の掃除である。これはただ掃除をするだけではなく、もっと深い意味が込められている。江戸時代には「すす払い」と言われ12月13日に年神様を迎えるため家を清める目的で行われていた。自分が思った通りうまく行かず、どんなに良くない一年であっても、新年が来ると年神様が各家に降り、幸福を授けてくれるという信念を持っている人が多かったそうである。それで、正月の前に皆は家のすべてのものを綺麗にして、年神様に訪れてもらいたい。家族が幸せに健康に暮らせるように皆は年神様に願うのである。現在もこの大掃除は続いているが、「一年の垢を落として新しい気持ちで新年を迎える」という意味が強くなってきた。

日本と同じく、ベトナムでは正月の前に家、庭、道を掃除する習慣がある。すべて綺麗にして、新しくいいことがいっぱい的一年が来てほしいとベトナム人は考えるからである。それにベトナムの正月の三日間はごみを捨てないようにするから、正月の前に掃除しなければならない。これは中国から伝わった古典にちなんでいるそうである。古典によると、アウミンという商売人が水神にウグェトという奉公人を授けてもらってから、商売がだんだんうまくいくようになった。しかしある元旦にウグェトは過ちを犯してアウミンに叩かれ、それを恐れて家の隅にあるごみに逃げ込んだ。アウミンの奥さんはそれを知らずに、ごみを捨てしまった。その後、アウミンの商売はうまくいかず貧乏になった。その後ウグェトは繁盛を持ってくる神様であると言われるようになった。人々は商売繁盛を願い、家の隅でウグェトを祀り始め、正月の三日間にごみを捨てると、お金や幸運を捨てしまふことになると考え、ごみを家の奥に置いておくようになったのである。

### **\* 飾り物(門松、しめ飾り)**

お正月になると、日本人の家で玄関前や門前に飾られている門松をよく目にする。「松飾り」「飾り松」「立て松」とも言う。正式な門松は、竹を三本束ねて、まわりに松を挿し、むしろで包んで、荒縄で三ヶ所を七五三（下から七、五、三巻と、筋目を見せる）に

結ぶものである。松と竹が選ばれるのは古くから神が宿る木で、まっすぐに節を伸ばす竹が長寿を招く縁起物だからである。関東では、丈の高い太い竹に松を加え、関西では、松の枝または小さな若松を用いている。松が飾られるようになったのは平安時代からで、鎌倉時代以後になって、松に竹を加えて現在のように玄関前や門前の左右に立てるようになったのは江戸時代からである。昔は榊、栗、柳なども用いられた。戦後に森林資源の保護により水害防止するため、門松が減り、現在では、豪華な門松を立てる家は少なくなってきた。最近では門松の写真を印刷したものを玄関ドアに貼りつけることなども見かけるようである。

門松はお正月に年神様が家々に訪ねねる時の目印として飾られる木である。今では正月の飾りもののように思われているが、もとは歳神が宿る安息所であり、または神霊が下界に降りてくるときの目標物と考えられていた。歳神とは正月に家々に降りて、一年の幸福を授ける神で、昔は白髪の福相の老人だと考えられた。そして「お正月さま」、「若年さま」、「歳徳神」などとも呼ばれる。今でも、若者が白髪の老人に扮して、大晦日の夜、家々を回って子供達を訪れ、お年玉として餅を与え風習の残っている地方もあるということである。

門松はだいたい12月28日までに立てる家庭が多い。29日に立てるのは「苦立て」といわれ嫌い。また31日にするのを「一夜飾り」といってよくないことだと言われる。31日では神様を迎える元旦まで一日しか残っておらず、神様を迎える誠意が足りないと思うからである。門松を取りはずすのはほとんど7日であるが、地方によって様々なようである。それで元日から7日までの期間は松の内と呼ばれている。

**しめ飾り**とはしめ縄で作ったお飾りで、神を祭る神聖な場所を示す印として飾られる。これも門松と同じく、お正月に年神様を迎えるための準備である。しめ飾りにはしめ縄（牛蒡締め）、玉飾り、輪飾りなどがある。

しめ飾りの由来は日本の最も古い本である古事記に書かれている。しめ飾りは日本の太陽の神様である天照大神と関係があるという。古事記によれば、天照大神は日本を生む2柱の神であるイザナギとイザナミの娘で、月の神様である月読命と嵐の神様の須佐之男命という弟がいる。後須佐男命はお母さんに会いたいと、高天原で暴れた。それを恐れた天照大神は岩戸に隠れ、天が暗くなった。それに困った神々は天照大神を呼び出すために、岩戸の前で宴会を行った。天の岩戸に隠れた天照大神が天の岩戸を出た後、再び岩屋に戻らないように、岩戸の入口に荒縄を引き渡した。正月にしめ飾りを飾る慣わしはこの神話から始まったそうである。しめ縄は新しいわらで作られ、四手のほか裏白、ゆずり葉、橙を付け、神棚に向かって根元を右にして飾る。新しいわらには、古い年の不浄を払うと共に、外から災いが内に入らないようにする力があると言われている。また前垂れしめ縄、大根しめ縄などの種類がある。しめ縄は一年間飾ってもいい。

玉飾りは、地方によって異なる。わらを丸くするか、わらを長くし、四手、水引、裏白、ゆずり葉、橙、昆布、海老などを付けるのが一般的である。



・裏白とは、裏面が白いことで、裏表のない潔白な心を示す。枝が長く伸びることから、長寿にも通じるとされている。

・ゆずり葉とは、一名親子草とも呼ばれ、新葉が成長してから古葉が落ちることから、家系が代々長く絶えないとされている。

・橙とはみかんで、冬を経ても実が落ちないため、正月の飾りの用いられ、家庭の益々の繁盛を願う。

・昆布は喜びの多いことを表す。

・海老は長寿を願うため。

**輪飾り**はわらのを輪の形に結び、下をそろえて長くし、それに四手を付けたものである。門松や門に飾ったり、家の中では水道の蛇口や床の間や台所などに飾る。さらに災いを避けるために自動車、オートバイや自転車などにも飾られるようになった。

しめ飾りは門松と同じく、2月28日までに飾り、松の内で取り外し、どんど焼きで燃やす。地方によって様々だが、だいたい7日、11日、15日のいずれかに取り払うのが一般的のようである。

#### \* 初詣

年が明けて初めて神社や寺に参拝することは伝統的な行事で、初詣という。大晦日の夜にお参りに行くのを除夜詣、元日にお参りに行くのを元日詣と言う。

春	立春（りっしゅん）	2月4日頃	雨水（うすい）	2月19日頃
	啓蟄（けいちつ）	3月6日頃	春分（しゅんぶん）	3月21日頃
	清明（せいめい）	4月5日頃	穀雨（こくう）	4月20日頃
夏	立夏（りっか）	5月5日頃	小満（しょうまん）	5月21日頃
	芒種（ぼうしゅ）	6月6日頃	夏至（げし）	6月21日頃
	小暑（しょうしょ）	7月7日頃	大暑（たいしょ）	7月23日頃
秋	立秋（りっしゅう）	8月7日頃	処暑（しよしょ）	8月23日頃
	白露（はくろ）	9月8日頃	秋分（しゅうぶん）	9月23日頃
	寒露（かんろ）	10月8日頃	霜降（そうこう）	10月23日頃
冬	立冬（りっとう）	11月7日頃	小雪（しょうせつ）	11月22日頃
	大雪（たいせつ）	12月7日頃	冬至（とうじ）	12月22日頃
	小寒（しょうかん）	1月5日頃	大寒（だいかん）	1月20日頃

表2 二十四節季

大晦日は旧年を跨ぐ間には日本の全国で除夜の鐘をつき始め、百八回鳴らす。鐘を百八回つくのは、二つの説があるから。一つは十二月と二十四節季と七十二候を合わせた数が百八になるそうからである。昔の暦は五日を1候にし、一年間が七十二候となるわけである。そして二十四節季は以下通りである。

別の説では人間が過去、現在、未来にわたって持つ百八つの煩惱を打ち払って、罪の消滅を祈るためだそうである。ですから除夜の鐘は新年行事の一部考えられている。昔、自

分の住まいからみて恵方にある神社、寺院に参った。恵方とは縁起の良い方角という意味で、その年の十干に応じた恵方に参ると、縁起が良いとされ、恵方詣とも言われる。恵方は、年によって異なるが、六十干支の頭につく「十干」で決まる。十二支と、十干を組み合わせると全部で60の組み合わせがある「60干支」という。

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸		
	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと		
十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い

01. 甲子	02. 乙丑	03. 丙寅	04. 丁卯	05. 戊辰	06. 己巳	07. 庚午	08. 辛未	09. 壬申	10. 癸酉	11. 甲戌	12. 乙亥
13. 丙子	14. 丁丑	15. 戊寅	16. 己卯	17. 庚辰	18. 辛巳	19. 壬午	20. 癸未	21. 甲申	22. 乙酉	23. 丙戌	24. 丁亥
25. 戊子	26. 己丑	27. 庚寅	28. 辛卯	29. 壬辰	30. 癸巳	31. 甲午	32. 乙未	33. 丙申	34. 丁酉	35. 戊戌	36. 己亥
37. 庚子	38. 辛丑	39. 壬寅	40. 癸卯	41. 甲辰	42. 乙巳	43. 丙午	44. 丁未	45. 戊申	46. 己酉	47. 庚戌	48. 辛亥
49. 壬子	50. 癸丑	51. 甲寅	52. 乙卯	53. 丙辰	54. 丁巳	55. 戊午	56. 己未	57. 庚申	58. 辛酉	59. 壬戌	60. 癸亥

表3 60干支

西暦と恵方一覧表		
西暦の末尾	十干	恵方
0, 5 年	庚（かのえ） 未（きのと）	西南西
1, 3, 6, 8 年	辛（かのと） 癸（みずのと） 丙（ひのえ） 戊（つちのえ）	南南東
2, 7 年	壬（みずのえ） 丁（ひのと）	北北西
4, 9 年	己（つちのと） 甲（きのえ）	東北東

表4 西暦と恵方一覧表

表4は西暦と恵方を示している。年とその年の恵方が分かるように、表4を参照。例えば、2005年末尾は8で、その年の恵方は西南西となる。

私は寺でお坊さんが行ったお祓いを受けた。お祓いとは、罪や穢れを清めるための行事である。神社のお参りに行ったときは賽銭をなげて、拍手を打った。賽銭を賽銭箱に投げ

入れることは自分の穢れを貨幣に託して、清められると考えられている。柏でとは両手を合わせ、左右に開いた後に再び合わせる行為を指す。普段、手を再び合わせる際に音を出す。音を出す理由は、感謝や喜びを表すためであり、また、願いをかなえるように神を呼び出すため、邪気を祓うためともいわれる。

そして、私は御神籤も引いてみた。御神籤とは一年の運勢を占う占いが書かれた紙で、大吉、吉、中吉、小吉、凶などの吉凶の七段階が一般的である。日本では引いた後の神籤を境内の木の枝などに結ぶ習慣がある。良くない御神籤を引いてしまっても、凶が吉に転じる方法が昔からあるそうである。その方法は、利き手と反対の1本の手で御神籤用の横棒や木の枝に苦労して結びつけるのである。そのようにすると、災いから逃れられて、凶も大吉に変えられるそうである。大吉も木に結びつけて幸運が叶うように願う。大吉の場合はいつも大切に身につけておくのもいい。

#### 4. 五行説に関係があるベトナムの旧正月の行事

ベトナムのお正月は旧暦の1月1日なので新暦では1月末頃から2月初旬頃の間で、毎年お正月の日が変わる。ベトナム語では「Tết Nguyên Đán」（テトグエンダン）、「テト」とも呼ばれている。ベトナムでも正月は一年で最も大切な時期である。お正月に家族と共に過ごすことが一番の幸せで、どんなに遠い所に住んでも人々は家に帰る。

春や新年を迎えるためにいろいろな行事が行われる。日本と同じく新年が良い年であるようにその行事をする。目的は同じであるが、日本とベトナムの新年を迎える行事は十分違う。以下には五行説に関係があるベトナムの正月の行事を紹介したい。

##### 4.1 Mam Ngu Qua（マムグークア）ー五種の果物の盆

「テト」の間は祖先の魂が帰って来て、子孫と一緒に新年を迎えると考えられている。仏壇にいろいろなものを供え、祖先が食べた後、祖先からの贈り物として家族が食べる習慣がある。お供え物の中の一つは「Mam Ngu Quaーマムグークア」という5種の果物の盆である。

表①を見ると、木火土金水の五気に配当されている色は順番に青、赤、黄、白、黒となるのが分かってくる。それに基づいて五気の象徴の果物を選ぶ。5種類の果物は地方によって異なる。北部では5色の果物として青いバナナ、仏手柑（ぶしゅかん）、唐辛子、梨、蜜柑を飾る。南部では、ココナツ、パパイヤ、釈迦頭、マンゴー、フサナリイチジクなどの縁起の良い5種類の果物を選ぶのだそうである。どの果物でもお正月に五種の果物を飾るのは家族の全員が揃って、幸せに正月を過ごせるように願いを表す。



五種の果物の盆のようにテトを代表する食べ物である「バインチュン Banh Chung」も五行に関係がある。

#### 4.2 Banh Chung (バインチュン)

バインチュンには次のような伝説が伝えられている。ベトナムの6世のフン王は20人の息子がいた。その中から跡継ぎを選ぶために、王は息子達に世界中から珍しくて美味しい食べ物を探そう命じ、一番美味しい食べ物を持ち帰った者に王位を譲ると告げた。上の兄弟たちはは遠い所まで海や山の名物を探しに行ったが、18番目の王子ラン・リュウは他の息子達と違い、天を表す四角いバインチュンと、土地を表すバインザイーを自分の水田で取れたもち米から作り、王に捧げた。王は大変満足し、その王子ラン・リュウに王位を譲った。それから正月に各家でバインチュンを作る習慣が始まったそうである。

バインチュンの大きさは15~20センチぐらいの四角いで、もち米の中に緑豆と豚肉が入っている。これを La Dong (ラーゾン、緑の葉っぱ) で巻き、竹ひもで結び、5~10時間ぐらいで茹でる。白いもち米は金気、搗いた黄色い緑豆は土気、豚肉は火気、外側で包んでいる緑の葉っぱは木気を象徴している。またバインチュンを茹でた後のお湯は黒くなり、これは水気の象徴である。

現在まで続くバインチュンを作る習慣は伝統的な文化を重視したり、先祖に対する感謝の気持ちも表したりする。

#### 4.3 ホアダオ (桃の花)

テトの時期になると、町のあちこちで花市場が立つ。ベトナム北部ではピンク色の Hoa Dao (ホアダオ、桃の花)、南部では黄色の Hoa Mai (ホアマ) がテトの象徴として各家庭に飾られる。ホアダオやホアマの色と共に、木に吊るす正月飾りは鮮やかな金と赤で正月気分をもたらす。それだけではなく、健康や幸運や商売繁盛などの願いも込められている。ベトナムの正月の桃の花を飾るのも、五行に基づく迎春行事のように思われる。

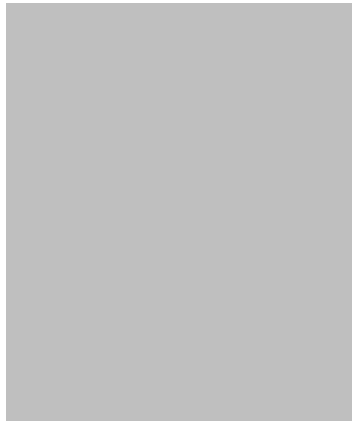
ホアダオには伝説がある。伝説によれば北部にあるソック山の東に巨大な桃の木があったそうである。その桃の木の上に Tra (チャー) と Uat Luy (ウアットルウイ) という神様が住んでおり、付近一帯の住民を悪魔から守っていた。悪魔達はその二人の神を恐れていたから桃の木も怖がるようになった。しかし毎年、年末に二人の神様は天帝に会いために天国に帰らなければならなかったため、この期間は悪魔達が人々を脅かす絶好の機会と

なった。そこで人々は自分を守るために、桃の枝を取り、家に飾り始めた。それから北部ではテトになると、桃の花を飾るのが習慣となった。

鬼は水気の象徴とされているから、鬼の怖がっている桃の花を飾るのは水気の鬼を送り、木気の春が早く来ることを促すものとも考えられる。

#### 4.4 Cay Neu(ケイネウ)

ケイネウは鬼を追い払うために正月に立てる。五行説思想を考えれば、ホアダオを飾る習慣と同じで春を迎える行事の一つではないかと思われる。ケイネウとは鬼の怖がっているものを吊るす一本の竹の木である。こずえに吊るすものはパイナップルの葉っぱや鳥の羽などである。提灯も掛けられている。また、鬼から人間を守るという意味もある。さらにケイネウは地面（陰）と天（陽）を繋いでいる幸福を受ける木とされている。



ホアマイとホアダオ



ケイネウ

#### 4.5 花火

ベトナムの多くの地域で除夜には花火を打ち上げる。除夜は旧年や新年と天地の変わり目の神聖な時刻であるから。

五行説で言えば、花火は硬いので、金気に配当される。金気の花火は木気の春を剋すから、木気の春を迎えるために金気を弱くしなければならない。花火は打ち上げられ、高い所で爆発する。五行の相剋順から考えれば、木気を強くするために金気を弱くする行事であると考えられる。

## 5 終わりに

日本語を勉強している私にとって、日本で一年間日本の正月行事、さらに日本の文化を研究できたのはとても良かった。日本文化を体験したい、日本人ともっと交流したいという気持ちで、日本語の勉強の努力に繋がる。

一年で最も大切な行事である日本の正月はベトナムの正月の行事と違う特徴を持っているのが分かった。前に日本の正月行事と陰陽五行説にこのような深い関係があると思わなかった。陰（月）と陽（日）と五行（火木土金水）も曜日のシンボルにされている。研究すれば研究するほど面白いと感じられる。

世界の国々はそれぞれ独特な正月の行事がある。自分の国の正月行事はなじみ深いものだが、その行事の起源や目的などを把握する人は多くない。生長するにつれて自然に生まれ育った国の行事が身に付くのは当たり前であるが、自国の行事をよく知っているとは言えない。調べたり、聞いたりしなければ、行事の起源や深い意味が分かってこない。社会の伝統的な習慣は薄らいでしまう。民族の伝統的な文化を守るために、もう少し努力が必要だと思う。

### 参考文献

- 1 飯倉晴式 「日本のしきたり」 青春出版社 2008 年
- 2 新谷尚紀 「和のしきたり」 日本文芸社 2007 年
- 3 吉野裕子 「吉野裕子全集」 第3巻 人文書院 2007 年
- 4 NGUYEN HUU AI-NGUYEN MAI PHUONG 「 Phong tục cổ truyền Việt Nam —ベトナムの伝統的な習慣」 文化・情報出版社 2003 年
- 5 TRAN HUYEN THUONG 「 Phong tục Việt Nam—ベトナムのしきたり」 労働・社会出版社 2006 年